

博士論文概要書

Immortal Longings

J. M. Coetzee の *Waiting for the Barbarians* 及び *Disgrace* における
命を巡る思索

本論文の内容と構成

本論文は南アフリカ出身の白人作家 J. M. Coetzee (1940-) の作品から、*Waiting for the Barbarians* (以下 *WFB*) (1980) と *Disgrace* (1999) を取り上げ、著者の思索を追っている。以下にその特徴を二つ述べる。

本論の特徴は第一に、両作品の創作ノートの研究に多くを負っているという点だ。その結果、二作の間に反復を見出している。ただしそれは単純な反復ではなく、時間の推移を背景にした反復である。そのため両作品の発表は *WFB* が 1980 年、*Disgrace* が 1999 年と約 20 年もの開きがあるにも関わらず、また外形上はまったく異なる物語であるにも関わらず、二作には続編と呼びうるような側面があることを主張している。

このような視点に立った上で本論は第二に、Coetzee が二作を通じてどのような思索を行なっているかという点に注目している。前述の時間的推移は、Coetzee が体験した歴史的時間と重ねうる。すなわち各時代における Coetzee の思索が、この二作に表現されていると考えられる。本論では *Disgrace* の状況を現在と位置づけ、過去から現在を通過し、未来への展望に至る Coetzee の思索を追っている。そしてその結果、彼の思索には命という核があること、すなわち命を巡る思索なのだという結論を導き出している。したがって生と死と、救済としての愛という小説の普遍的テーマを Coetzee もまた踏襲している。ただし Coetzee を Coetzee たらしめているのは異人種、女性、動物など「他者」の命にこのテーマの重点が置かれている点だ。いかえればそれは「他者の命を、命そのものとして、どう感じ取るか」という問題に対する Coetzee の取り組みなのである。

これは非常に困難な取り組みである。なぜならば Coetzee の思索は、ポストモダン思想が発見した現実把握のなかにあり、この現実においては言葉が真実に——他者はもちろん、自分の真実にさえ——行き着くことはできないからだ。したがって真実を伝達することもできない。このような現実のなかで Coetzee は権力によって見失われた他者の命にリアリティー——存在するという真実——

一を見出し、言葉でその命を回復させようとする。とすれば彼は同時に伝達機能がすでに失われた言葉から、その機能の回復も試みなければならないのである。本論はその困難な試みを仔細に見つめている。

以上が本論の二つの特徴である。具体的構成は以下のとおりである。

序論

第一章

過去——死の二つの意味

1. 死の二重性について
2. “no one deserves to die”
3. 読めないという意志
4. 夢：もう一つの物語
5. 最終シーンについて

第二章

過去から現在——生と死のパターン

1. *WFB* 創作ノートに記された初期構想について
2. *WFB* 初期構想と完成版 *WFB*
3. *WFB* 初期構想と *Disgrace*
4. 反復であり続編であること
5. *WFB* その後

第三章

現在——父娘のパターン

1. *Disgrace* 以前： *WFB* 創作ノート及び *WFB* における父娘関係
2. Soraya とその父
3. Melanie とその父
4. David と Lucy
5. David と Petrus

第四章 現在から未来へ——オペラと犬

1. Byron in Italy
2. オペラ構想の変更：David の変化
3. passion の欠如
4. 犬：二つのグループ
5. 犬の火葬
6. *WFB* ノート：死者の埋葬
7. immortal longings
8. 愛について：Driepoot

第五章 未来へ——Lucy

1. 死の影
2. Lucy の抵抗
3. ヒエラルキーの解消：Lucy の成長
4. Michael K と Lucy
5. 新たな世界へ：処女懐胎の物語

結論

引用文献

Coetzee の作品に対しては、しばしばとらえ難さが表明されてきた。しかし本論は *WFB* と *Disgrace* の二作品を続編関係のなかに置くことで、彼の作品に一貫した思索を見出している。本論ではさらに *Disgrace* のあとに出版された *Slow man* や *The Childhood of Jesus, The Schooldays of Jesus* に、本論で述べた思索が引き継がれている点にも言及し、Coetzee の半生に渡る最も根本的であり、最も重要な思索の流れに初めて光を当てている。

第一章 過去——死の二つの意味

第一章では *WFB* を取り上げ、この物語における“death”の意味をまず論じている。さらにこの“death”に対する語り手の取り組みを探求している。

*

WFB ではある辺境の町に帝国の首都から治安警察の部隊がやってきて、先住民である夷狄を敵と見なして拷問にかけていく。物語の語り手である初老の行政長官は、拷問による夷狄の死を目の当たりにする。彼はこうした帝国の暴力に抵抗し、自らが拷問の標的となる。拷問を通じて彼は圧倒的な身体の苦痛、

いわば身体の主張を身をもって知る。その主張は正義よりも前面にある。正義は物語であり、常に書きかえられていく。行政長官はどこまでも確定し得ない正義の物語ではなく、身体の主張をこそ信用するのだ。そして彼は「何者も死に値しない」と訴える。

一方、行政長官は帝国の拷問を受けた夷狄の娘と交流する。彼にはこの娘が空白のように感じられる。このことは行政長官にとって、娘が強力な他者性を発揮していることを意味する。そしてこの「空白」には置き換え可能な言葉として“death”が並べられている。すなわち *WFB* における“death”には二つの意味——身体の消滅と、空白のように感じられる他者及び他者の世界——が隣接している。他者は空白のように感じられるために恣意的な読解を許容する。たとえば帝国は自らの存続のために夷狄を「敵」と読解し、そう記述することで彼らへの拷問を正当化する。そしてその結果、夷狄の身体が破壊される。すなわち他者であることは身体の消滅を呼び込む。ここには“death”の二つの意味の隣接を見出しうるだろう。では行政長官はこの隣接にどう向き合うのか。

彼は空白のように感じられる夷狄の娘を理解するために、帝国が娘の身体に刻んだ拷問の傷跡“marks”を解読しようとする。この行為は行政長官の帝国への従属を指し示しているだろう。実際、娘に“marks”を刻みつけたいという欲望が心の奥底にあったことを彼自身が認める。これは彼女の全存在を彼の言葉、彼の物語で決定しようとする支配への欲望ととらえうる。行政長官は次第に帝国の暴力に対する彼自身の共犯性を認めていく。しかしその一方で彼を共犯者という一語に集約することはできない。行政長官は最後まで娘に書き込まれた“marks”を読めない（読まない）ままだ。彼が“marks”を通じて娘の意味を捏造することはない。ここには他者の恣意的な読解と記述を通じた暴力を回避する意志を読みとりうるだろう。

第二章 過去から現在——生と死のパターン

第二章では *WFB* 創作ノートの読解を通じて、*Disgrace* における *WFB* の反復、及び続編と位置づけられる側面を導き出している。その上で二作が反復及び続編関係にあることの意味を論じている。

*

WFB と *Disgrace* は一読する限り、関連性のない別個の物語だ。*Disgrace* は 1990 年代後半の南アフリカが舞台である。女学生 Melanie からハラスメントで訴えられ免職となった 50 代の白人教師 David Lurie は、東ケープ州で小農園を営む娘 Lucy のもとに身を寄せる。するとまもなく三人の黒人男性の襲撃を受け、Lucy はレイプされ妊娠する。このように *WFB* と *Disgrace* には一見、接

点がない。しかし *WFB* の創作ノートに目を通すと、両作品が実は同じルーツを持つのだと気づかされる。創作ノートには男が女を死に追いやるという構想が、終末とフィクションという二つの視点から記されている。どちらの視点においても、終末幻想にとらわれた男のナルシスティックな世界観が女を抑圧する。そしてこの構想は二つの視点とともに、完成版 *WFB* においては行政長官の夷狄の娘との関係に、*Disgrace* においては David と Melanie の関係に取り入れられている。そこから両作品に一定の関係を想定しうる。実際二つの作品を並べてみると、*Disgrace* を *WFB* の反復かつ続編であるととらえることが可能だ。

両作品が反復かつ続編関係にあるという位置づけは、行政長官及び David の女たちとの関係性から導き出すことができる。完成版 *WFB* で行政長官は主に三人の女たちと関係を持つ。夷狄の娘の他には娼婦と元料理人の Mai だ。一方 *Disgrace* でも David が性的な関係を持つのは主に三人の女たちである。Melanie の他には娼婦と、動物愛護の立場から動物のためのクリニックを運営する Bev だ。夷狄の娘及び Melanie との関係性には前述のように、*WFB* 初期構想の男女関係が反映されている。ではその他の女性たちとの関係はどうか。行政長官及び David とそれぞれの娼婦との関係は驚くほど類似性が高い。どちらの娼婦も男たちの欲望が十分に発揮され十分に満たされているのだという彼らのフィクションを、男たちに協力して担う役割を持つ。そして彼女たちが去ると彼らは欲望の断絶を考え、老いと死の現実を見据えるのだ。一方 Mai と Bev はともに男たちとの理想の女性像とはかけ離れている。彼女たちとの関係には欲望も情熱も介在しない。そこには男たちがフィクションを重ねる隙もなく、彼らは彼女たちとの関係を通じて終末の現実を見つめる。そして彼女たちとの関係が終わると、男たちは死の受容ともとらえられる行動に出るのだ。

以上のように三人の女たちとの関係には、両作品における反復性を見出しうる。そして娼婦との関係についていえば、反復を表すばかりではなく *Disgrace* が *WFB* の続編と読みうる可能性を仄めかしている。*WFB* における行政長官の娼婦との関わりは物語全体に分散されている。そして彼女が町を去り、行政長官が老いと死の現実に向きあう場面は物語終盤にある。一方 *Disgrace* における David の娼婦との関わりはすべて物語の冒頭に集約され、David が欲望の断絶及び死を考えるのも物語冒頭だ。つまり行政長官が物語を語り終えたところから David の物語は開始する。とすれば帝国の支配が終わり、自分が属してきた世界に死が与えられた行政長官のその先が、アパルトヘイト後の南アフリカに住む白人 David の姿なのではないか。こうした観点に立てば *Disgrace* を *WFB* のその先の物語、すなわち続編ととらえうる。その場合、反復は単純な反復ではなく時間的推移とともにある反復のはずだ。ではどこに時間的推移における

変化を見出しうるだろう。

女たちとの関係を貫いているのが男たちの死へ向かう軌道である。*WFB*において行政長官は、自分自身の暴力性を見出すことによって死を受け入れていく。一方 *Disgrace* の David は出発地点においてすでに死の内にあるが、そこから逡巡が始まる。そして外部から死の現実を突きつけられていく。こうした David の姿には新たな世界への疑念を発見しうる。行政長官が彼自身の暴力ととらえるのは、彼が属する世界の暴力である。これに対し David の暴力性に結びつけられるのは黒人三人組の暴力だ。それは David にとっていわば他者の暴力である。たとえ David が死を受容したとしても、その先に未来を築いていくはずの他者の姿はあからさまに暴力的なのである。彼らを生かし自らに死を与える倫理的契機を David は持ち得ない。

ただし David にはまったく別の形で倫理性を見出しうる。それは自らの暴力性を行政長官ほど明確に認識できず、アパルトヘイト後の世界で自らの思考形式を変えることができない David の一つの覚悟である。すなわちそれは際限なく罰を受け続け、その“disgrace”を無期限に引き受けようとする覚悟だ。*WFB*の末尾で行政長官は自らの姿を“... like a man who lost his way long ago but presses on along a road that may lead nowhere”と語る。この先どこにも行き着かない道を歩き続けるのが David だ。ただしそれは積極的な歩みではある。

第三章 現在——父娘のパターン

第三章では両作を貫く父と娘のパターンを *Disgrace* を中心に導き出し、そこに男性性における支配の暴力、及びその歴史的な連鎖が映し出される様子を見つめている。

*

父娘関係は *WFB* にも見出されるが、主に *Disgrace* において顕著に展開される。*Disgrace* における父娘の概念は単純な親子という関係性に収まらない。現実的に父娘である David と Lucy の物語が展開する以前に、娼婦 Soraya や学生 Melanie との関係に父娘のイメージが重ねられる。つまり男女の関係性が、David の意識のなかで父娘の関係性に読み変えられるのだ。このとき父とは血縁の父を指すばかりではなく、家父長の意味を含んでいるのだととらえうる。そして David と Soraya、David と Melanie、David と Lucy の各物語には、ある共通のパターンを見出せる。そのパターンとは第一に、今述べたように男女の関係性が父娘の関係性に読み変えられる。ただし現実的な親子である Lucy の場合は、父娘の関係が男女あるいは夫婦の関係性に読み変えられる。第二に人種関係が盛り込まれる。したがって南アフリカにおける人種差別の歴史が示唆

される。第三に現実的に Soraya、Melanie、Lucy の「父」、もしくは「父」になりつつある人物に David が対峙する。David は彼自身を彼女たちの「父」に位置づけようとするが、彼女たちの現実的な「父」に敗北していく。つまりそれぞれの関係に父対父の対決を読み込むことが可能であり、David はそうした対決において常に敗れていくのである。

David の視線はムスリムである Soraya、またカロードもしくは黒人と推察される Melanie をたびたび娘あるいは子どもととらえる。このことは父の座への欲望、いかえれば所有欲、支配欲を表わしているだろう。そこには人種差別の歴史が浮かび上がる。ただし彼女たちの現実的な「父」に対峙するとき、David は引き下がるしかない。一方 Lucy については David が現実的な父だ。David はたびたび Lucy との父娘関係に、男女もしくは夫婦関係を重ねる。すなわち David には娘との近親相姦願望が認められる。これは娘に対する所有欲及び次世代も父の座に留まろうとする権力への欲望を表わしているのだと考えられる。そして Lucy を巡り彼が対峙するのが、コーサ人と考えられる黒人の Petrus だ。彼は当初 Lucy の助手であったが、次第に資産を蓄えていく。David は Petrus に対し人種差別的な視線を送ると同時に、その視線を抑制している。しかし二つの現実が父の座を巡る David の Petrus への敗北を決定づける。第一に Lucy が黒人三人組のレイプにより妊娠し、彼らを父とする子どもを産むことが明らかになる。しかも三人組の一人は Petrus の保護下にある。自らを西洋人と意識する David は彼自身の消滅を感じる。第二に Petrus は Lucy の土地と引き換えに彼女を第三の妻として保護することを提案し、Lucy は承諾の意向を示す。すなわち家父長の座は、明らかに David から Petrus に移動していくのである。

こうした「父」の移動には、男性性に内在する暴力の連鎖の歴史が浮かび上がる。そしてこの連鎖が指し示すのは、進歩が得られないという幻滅だ。新たな「父」は白人の「父」と比して何ら発展的ではない。むしろあからさまに暴力的で、より野蛮に見える。ただし Coetzee は作家として幻滅のその先を描く責任を負っているだろう。実際 *Disgrace* において彼は暴力の連鎖の一端を示すという地点に留まっているわけではない。Coetzee は一つには、David の姿を通じて頑迷な主張を行なっていると考えられる。それは暴力の連鎖に対抗する主張である。次章では David のその主張に注目する。

第四章 現在から未来へ——オペラと犬

第四章では *Disgrace* の David の成長をとらえている。具体的には父の座を追われ死の意識を深めていく David が“immortal longings”に至る過程である。そこには普遍的倫理への模索が見える。

*

David はイタリア時代、すなわち晩年の Byron をオペラの題材に据えている。彼はオペラの構想を一度大きく改変する。第一段階では Byron と彼の若き愛人 Teresa の関係を描いていたが、第二段階では Byron はすでに没して久しく、中年になった Teresa が Byron の生の世界へ取り戻そうと彼の名を呼び、“immortal longings” を歌う。オペラの構想におけるこうした改変は David の死への意識の深まりを表わしているのであり、これは Lucy の父であることの終焉と同時進行している。そして死の意識が深まるほど、命のかけがえのなさが理解されていくという構図が見出される。

一方で David は犬を中心とする動物たちの死を見つめる。*Disgrace* における動物たちは二つのグループに分類できる。黒人たちが銃殺もしくは屠殺するグループと、Bev と David が安楽死させるグループだ。黒人たちが動物に与える死はあからさまに残酷だ。一方 Bev と David が与える安楽死は、いわば人間の権利を動物に付与するものととらえられる。しかし犬たちは死を感知して怯える。その姿は死を与える手段における差異を不鮮明にするのである。David は安楽死させた犬たちの遺骸の焼却、いわば火葬を一人で執り行うようになる。その行為には、往々にして認識されない他者の命が確かに存在するのだという訴えを読み取りうる。この訴えにおいて人間と動物の間に境界はない。ただ David のこうした行為にも問いが付されているだろう。犬たちは単に多過ぎるという理由で安楽死させられるのであり、David もこれに抵抗できないのである。

前述のように David のオペラのなかで、Teresa は “immortal longings” を歌う。これは Byron の愛と生を取り戻したいという不断の願いであると同時に、詩人の愛を得た女性として永遠に記憶されたいという不死の願いである。これは David が生の “passion” を求める姿と重なる。David にとって “passion” とは “Eros” や “fire” とともに生を燃焼させる力であり、生きることそのものを表わす。それは詩を生み出す力でもある。David は彼自身には運命的に “passion” が欠如していると感じている。だからこそ “passion” の獲得ではなく、それを求め続けること、すなわち “immortal longings” の表現に創作の情熱を芽生えさせていく。そして Teresa と同様に David もまた作品を通じて、不死を願うのだ。Coetzee は古典とは多くの人々の吟味に耐えて生き延び、野蛮に勝利するものことだと書いている。では David の “immortal longings” が生き延びるのであれば、それはどのような野蛮に勝利するのか。“immortal longings” は生の、命の切望だといえる。とすれば “immortal longings” が勝利しようとする野蛮とは、命の無視であり、破壊であるだろう。

ただしこうした David の “immortal longings” も問いのなかに置かれることになる。*Disgrace* は Driepoot と呼ばれる犬の安楽死で幕を閉じる。この犬はとりわけ David になつき、彼がオペラ創作を行なっているときには Teresa の “immortal longings” を歌い出さんばかりだ。すなわち Driepoot もまた命を願っているように見える。David は “love” としか呼びようがないという献身を持って Driepoot を安楽死させる。ここにまず問いが生じる。憎悪のなかで命を奪う行為は野蛮そのものであった。では愛のなかで命を奪う行為は？ *Disgrace* においてこの問いに答えが示されることはなく、開かれたままだ。そして問いはもう一つある。こうした David の死につきそう愛は *caritas* もしくは *charity* と考えられる。David は物語を通じて *Eros* を信奉しているが、最後の拠り所となるのは *charity* なのだろうか。この問いもまた開かれたままだ。

第五章 未来へ——Lucy

第五章では David の娘 Lucy が、David の旧弊な思考形式では想像し得ない未来の構築にどのように取り組んでいるかを考察した。また *WFB*, *Disgrace* で行なわれた思索は、主に *The Childhood of Jesus*, *The Schooldays of Jesus* に引き継がれている点にも触れている。

*

Lucy には周囲に彼女の命が無視されているという状況において死が暗示されているが、一方で明るい光に包まれた未来が結びつけられている。すなわち生から死へという道筋を描く David とは逆に、彼女には死から生への道筋が希望のなかに照らし出されているのである。黒人たちによるレイプを受けたとき彼女を驚愕させたのは、彼女に向けられた個人的憎悪であった。Lucy はこれを乗り越え、彼らの隣人となり平和な共生の未来を勝ち取ろうとしている。そのために未だ白人への憎悪が強い東ケープの土地に居続けるのだ。Lucy は “Like a dog” のように生きるという。それが彼女の出発点だ。そしてそこから彼女が目指すのは、人間の地位の回復ではない。“Like a dog” が人間以下の地位を意味しない、いいかえれば底辺が底辺ではなくなる世界である。それは彼女自身の、また動物の命が認識される世界であるはずだ。一方 Lucy が “Three fathers in one” により身籠もるという文脈には、新約聖書における処女懐胎神話の暗示を見出しうる。そこには Lucy が産まれてくる子どもとともに、新たな世界を作り上げていくという希望が込められているだろう。

結論

本論文は J. M. Coetzee の *WFB* と *Disgrace* を取り上げ、著者の思索を追っ

た。突き詰めればそれは「命」を巡る思索であった。Coetzee はインタビューで “in South Africa it is not possible to deny the authority of suffering and therefore of the body” と語っている。おそらく Coetzee の思索の出発点はここにある。この地点からどのように他者の命を認識し、尊重しうるかが模索されているのである。両作品においてはあからさまな暴力を奮うことのない人物の暴力性が探求され、その上でどう成長しうるかが模索されている。そして特に *Disgrace* においては “immortal longings” が David の大きな成果であるだろう。“immortal longings” は彼だけのためのものではなく、他者のための——女たちの、とりわけ動物たちの、さらには生きるものすべてのための——命を願う歌であるのだ。そして David は未来に “a single authentic note of immortal longing” を伝えようとしている。

命を巡る思索は、主に処女懐胎の物語が反復される *The Childhood of Jesus*, さらに *The Schooldays of Jesus* に引き継がれていく。そこでは未来の創造へ向けての思索が始まっている。理性に替わるような新たな価値基準が模索されているのである。試行錯誤の思索は今も続いている。